

遇

～ ぐ う ～

encounter magazine "Guu"



金相寺境内・親鸞聖人行脚像

11月

November 2011

創刊号

【寺報発刊にあたって】

この度、金相寺では親鸞聖人七五〇回御遠忌をお迎えするひとつの形として、寺報を発刊させていただくことになりました。

寺報を発刊させていただく上での私どもの願い、それはお寺の活動を皆さんにお伝えすることはもちろんですが、この場を通してお寺とご門徒の皆さん（浄土真宗では檀家とは言わず、門徒と言います）という、どこか壁のある関係性を超えて、共に教えを聞いていく仲間・御同朋として、この寺報を通して出遇っていきたいということがあります。

そして、そのような願いからこの寺報のタイトルを「遇くぐうく」とさせていただきました。

普段私たちが「あう」と言った時、皆さんはどのような字を思い浮かべるでしょうか。きっと「会」「逢」などを思い浮かべる方が多いのではないかと思います。

しかし仏教では「あう」と言った時、この「遇」という字を使います。

何故この「遇」という字を使うのでしょうか。辞書でこの字を調べてみると、「思いがけず、出遇う」とあります。「会」という字に比べて、どこか「あう」という事柄に深い意味が見い出されているように思います。

そして、そのことを知った時にふと思ひ出されたのが、お盆やお彼岸、報恩講などの法要で、法話の前に皆さんで唱和する『三帰依文』の「人身受け難し、今すでに受く。仏法聞き難し、今すでに聞く」という言葉です。

受け難い身を今ここに受け、聞き難い仏の教えを今こうして聴聞させていたでいています。その出遇っているという尊い事実を、私たちはどこか当たり前のことのようにして、軽く受け流してしまっただけではないでしょうか。真に「遇う」とは一体どういうことなのでしょうか・・・。

情報化社会といわれる昨今、パソコンや携帯電話を開けば何でもわか

る時代になりました。また、それらを利用して、簡単にいつでもどこでも・誰とでもつながることができるようになりました。しかし、その一方では、肝心の人間というものがいよいよ見えなくなり、暗くなっているように思います。

「あう」ということを改めて考える時、その事実をしっかりと受け止めていくこと、その出遇いを本当の意味で成就することが、私たちにとってとても大切で意味のある事なのではないかと思えます。

この機関誌が仏さまの教えと、そして共に教えを聞く皆さんと、更には自分自身と出遇っていききっかけに少しでもなればと思っております。どうぞよろしくお願い致します。

合掌



かみこ くじゅうねん
紙衣の九十年

親鸞聖人はおよそ八百年ほど前、京都に誕生され、九十歳でお亡くなりになりました。

その人生を通してお伝え下さったお念仏の教えは今もなお、人々の心に響き、生きる勇気と力を与え続けています。悪人正機説や肉食妻帯されたということでも有名ですが、一体親鸞聖人とはどのような方だったのでしょうか。

ここでは親鸞聖人のご人生について共に触れていきたいと思えます。



●誕生

親鸞聖人は、承安三（一一七三）年、京都は宇治にほど近い日野の里で誕生されました。幼名若松丸。父は藤原北家の公家・日野有範、母は源氏の流れを汲む吉光女と伝えられています。

親鸞聖人が生まれ育った時代は、源平の争乱のまっただ中で、社会的にも飢饉や疫病、様々な天災などが起き、激動の時代でした。

そのような中、松若丸四歳の時に父君と悲しい別れをなされ、八歳の時にはお母さまが亡くなられたのです。孤独の身となられた松若丸は、伯父範綱卿のもとで育てられました。

●出家得度

養和元（一一八一）年、聖人九歳の春、伯父の範綱卿につれられて東山の青蓮院をたずね、慈円和尚のもとで出家得度し、範宴（はんねん）と名のられました。

その際、すでに夜も更けていたので、慈円和尚に「得度の儀式は明日にしましょう」と言われ、それに対して聖人が詠まれたといわれるのが次の有名な歌です。

**明日ありと 思う心のあだ桜
夜半に嵐の 吹かぬものは**

親鸞聖人の切実な無常観を詠った和歌として、今もなお、念仏の教えを聞き学ぶ多くの御同行達の間で伝えられているものです。

そして、そのような出家得度を経て、以後二十九歳までの二十年間、比叡の山で仏教の学問・修行に励まれました。

※次号以降も引き続き聖人の御人生に触れてまいりたいと思えます。



おんどうぼう 御同朋の聲

親鸞聖人は共にお念仏の教えを聞く仲間を「御同朋ーおんどうぼうー」と呼ばれました。寺からの声をお伝えするだけでなく、ここでは共に教えを聞き学ぶ御同朋・仲間同士の交流の場として皆さんの声をお聞かせ下さい。

【 寺報発刊に寄せて 】

森 正英氏（金相寺責任役員）

金相寺がこの地に建立されて三ヶ月後、縁あってこの寺にお世話になり、修正会・春秋の彼岸会・盂蘭盆会・報恩講と法要時にはお手伝いさせていただいております。

当時、檀家の方も少なく宗教法人

の認可申請にあたり二名の責任役員登録が必要とのことで、その任を受けたのが三十数年前になります。若年の私としては 仏教とは何なのか、どんな教えなのか分からぬまま、寺での法要のあと住職の法話を通して、仏の教えを心を空にして聞いてきました。

この世の中はたえず移り変わっている世、すなわち無常であるということ。人間の世は苦しみの世界であることに気づかぬまま年をとって人生を終わるということを悟り、これらの苦しみをどう受け止めるか、どう考えるか、どんな心構えをしなければならぬか、そのようなことを教えてくれるのが仏教なのでしよう。

葬式・法事等、各寺院で勤められている追善供養としての儀式は、仏の教えとは別のものと思います。

近年、仏教ブームというか京都・奈良を訪ね座禅をしたり瞑想にふけったり、リフレッシュする人が多いと聞きます。京都の若い僧侶たちで

フリーマガジンなるものを創刊し宗派を超えて気楽に寺へ行きやすくしている動きもあるようです。

副住職におかれましても寺へ老若男女、気軽にこられるよう今回の発刊に期待しております。



【 親鸞像について 】

篠 正美氏（金相寺責任役員）

金相寺さんに檀家としてお世話になって、かれこれ二十八年になる。

かねてから宗教や信仰には無関心・無頓着だった私は、恥ずかしながら仏事に関しての知識は全くないほど持ち合わせていなかった

たと云っていい。その頃私の母が健在でそれらについては母任せとしていた。心のどこかで「遠い将来のことだから」という思いがあったのだとも思う。

歴史好きの体の突然の死に遭い、思いもよらず寺との早いお付き合いが始まったのである。篠家代々の菩提寺は真言宗室生寺派であったが、生前故人が親鸞聖人を大変崇高、崇敬していた話を耳にした記憶があり、縁あって金相寺さんのお世話になり、今日に至っている。

当初、寺で行われる法要の度に、住職から「親鸞聖人の御立像を描いて欲しい」と言われたが、私は半分冗談であろうと思っていた。

絵を描くことを生業としている自分にとって、軸絵は別世界のものであって、それらは仏画専門の絵師の仕事だろうと思っていたから、ただ頑なに辞退を申し上げていた。

二、三年そんなやり取りがあったと記憶しているが、その後も執拗に依頼され、二十年ほど前に渋々請け

負わざるを得ない羽目になったのである。

洋画というジャンルを勉強してきた私には、一般的に油彩・水彩・パステルといった素材を扱って、自らのイマジネーションを具現化する制作方法を取ってきたわけであるが、掛物となると全く異なるのである。



篠画伯が描かれた親鸞聖人御真影

美大時代に日本画家の友人から得た岩絵具や絹本など、おぼろげな知識を元に色々試行錯誤を繰り返し、やつと日本画でよく使われる鳥の子紙（和紙の一種）に油彩がうまく乗ることに行き着いたのである。

さて、今度はデッサンである。本

来の私の仕事ではデッサンから入るが、今回のモチーフは親鸞聖人である。いい加減な、架空の人物ではなく、実在した人物である。美術出版編集者の知人に頼み、数多くの資料を揃えてもらったが、一点を除き全てが座像なのである。その一点が西本願寺にある、国宝の「鏡の御影」であり、その複製資料を元に作画したのである。

描いた鳥の子紙はかなり分厚いものであるが、表面をコンマ何ミリの単位で剥ぎ取り、実に立派に表装されている。出来はともかく、珍しい油彩の掛け軸である。





無碍の一道

波荒く厳しい情景を思い浮かべていたが、太陽に照らされ、光り輝く紺碧の大地がどこまでも続くような錯覚を起こさせるほど、小波もない静かな北陸の海もあるのだと思いがら、私は広い砂浜に腰を下ろして、右手に乾いた白砂を握りしめながら、遙か沖合に浮かぶ貨物船を見つめていた。



親鸞聖人御上陸之地・居多ヶ浜

握りしめた白砂が指の間からこぼれ落ちるのを指先で感じながら、喜び・悲しみ・慚愧ざんきといった感情が同時に胸に込み上げてきて、目頭が熱く潤い、遠く沖合に浮かぶ貨物船が蜃気楼のように歪んで揺れていた。

ここは新潟県上越市直江津こたがはま居多ヶ浜である。居多ヶ浜は、祖師親鸞聖人が誠に理不尽極まりない為政者の横暴によって流罪となりし地である。時に承元元年（一二〇七）

如月、聖人三十五歳であられた。

浜から向かう陸地は急な高台になっており、浜から急坂を二、三〇〇メートルほど登らねばならない。その坂の登り口に「親鸞聖人御上陸之地居多ヶ浜」と刻まれた石碑が建っている。その坂を登り切ったところに「見真堂」の額の掛かった八角形のお堂があり、その堂の中に親鸞聖人の座像が安置されている。

その見真堂の入口近くには自然石に「もしわれ配所はいしよにおもむかずは、

何によりてか辺鄙へんびの群類ぐんるいを化せん。これ猶師教なをしきょうの恩致おんちなり」と『御伝鈔』のお言葉が刻まれた碑がある。



見真堂・親鸞聖人御

当時の流人の生活がいかに厳しいものであったかということは、延喜式えんぎしきを見るまでもなく、想像するに難くない。当時の為政者の横暴極まりない一方的な断罪を受け、都から遠く離れた僻地へ流され、流罪人として極限の生活に耐えねばならない立場に御身を陥れられながらも、「これ猶師教の恩致なり」と深い深い御恩徳の意を表されている。

これは一体どういうことか。地位や名誉や財等々を懸命に追い求めてる者にとって、流罪とはひたすら

追い求めてきたその全てを失い、最も過酷な生活を強いられることであって、死以上の仕打ちでもあろう。

しかし、祖師聖人はそのような地位・名誉・財等々を追い求めてきたのではない。ただただ凡ての人々がいかなる境遇にあらうとも、確かな救いの道を比叡の山で求め続けること二十年に及んだ。しかし、求めれば求めるほど、行ずれば行ずるほど、仏から遠のくように思われてならない我が身に戦慄されたのではなからうか。「いずれの行もおよびがたき身なれば」と比叡の山を去られた親鸞聖人が、ただひとつ最後の望みとされたのは、同じように比叡の山を捨てられ、吉水の禅坊で「ただ念仏」と説かれていられると仄聞する法然上人だったのでなからうか。時を経ずして法然上人に謁せられた親鸞聖人は「たちどころに他力攝生の旨趣を受得」せられたと『御伝鈔』に見られる。この時祖師聖人とつ

て法然上人は、永遠のいのちの親、阿弥陀佛の化身と拝まじにはいられなかつたのではないだろうか。



親鸞聖人が堂僧を勤めていた
比叡山・常行堂

無謀な権力者達のために、み仏の化身のごとく崇めずにはいられない法然上人との縁を引き裂かれることは、堪え難き悲しみであった。しかしながらその堪え難き悲しみを超えて、凡ての衆生を救わねばおかぬとするみ仏の誓願である念仏のみ教えを、耳にだにもされなかつたであろう都から遠く離れた僻地の人々に伝

えることのできる機縁を戴いたことは、み仏の、法然上人の深いご恩徳と、喜びに転成されていられる。

この念仏弾圧のできごとを「承元の法難」というが、この承元の法難を後に、親鸞聖人はご本典の後序に「主上臣下、法に背き義に違し、忿を成し怨を結ぶ」と、大変な憤りをもって印されている。抑えがたき憤り・忿り・悲しみとしながらもなお、ご恩徳として、深い喜びとして受け止めていかれた印が、先の「これ猶師教の恩致なり」の碑文であろう。



御伝鈔のお言葉が刻まれた石碑

この事は吾人に「念仏は一切の碍りを徳に転成させる用き」の証をお示し下されてある。我執にとらわれ、狭い世界に生きている我らは、障りばかりの日々であるが、念仏に導かれることで、広い広い世界に覚めさせていただき、諸々に濁った万川が、大海に流れ込み、一味の潮と成るごとく、念仏は障碍多き人生を、功德に満ちた人生に転成せしめる用きである。

ご和讃にも「罪障功德の体となるこおりとみずのごとくにて こおりおおきにみずおおし さわりおおきに徳おおし」とお教え下されてある。

御本典信卷末には「金剛の真心を獲得すれば、横おに五趣・八難の道を超え、必ず現生げんしょうに十種の益やくを獲うとあつて、十種の益が上げられてあるが、その第三種に「転悪成善之益てんあくじょうぜん」が示されてある。これは「転碍成徳」とも言い替えることもできよう。

念仏の信心を獲得すれば、碍りを

転じて徳と成し、悪を転じて善と成す大道に導かれる。全ての障りを徳に転成せしめる道こそが、障碍なき道、「無碍の一道」である。

『歎異抄』第七章に「念仏者は無碍の一道なり」とある。真宗念仏のみ教えにご縁をいただきながら、「無上深甚功德利益の広大なることむじょうしんじんくどくりやく、その極まりなき」念仏に覚めることなき人生は、「宝の山に入りて、手を空しくして帰らん」に等しき人生と言わねばならない。

南無阿弥陀仏

成田 宣信（金相寺住職）



副住職の

日々の出遇い



金相寺では、お寺が老若男女を問わず集える場となることを願って、今年から青年会と子ども会を開催しています。ここではそこでの活動を中心に日々の出遇いをお伝えしていきます。

※青年会・子ども会の詳細はホームページをご覧ください

●青年会のご案内

月に一度のペースで、毎月青年会を開催しています。会の名前は“無意味の会”

無意味なのにわざわざ開催する必要があるの？という声が聞こえてきそうですが、私たちが普段当たり前だと思っている価値観・モノサシにちよつと疑問符を付けて、日頃なかなか考えたり話し合ったりできないようなことを、同世代の人間同士で集まり、語り合いませんか。時には熱く！時にはワイワイ楽しく語り合いながら、ゆつくりとした時間を共有しています。

是非、お友達やお連れ合い等、有縁の方々お誘い合わせの上、お気軽にご参加下さい。



●子ども会のご案内

金相寺子ども会、その名も“金ピカキッズ”。記念すべき第一回が八月に開催されました。

みんなと一緒に正信偈のお勤めをし、第一回を記念して子ども会の旗を作りました。また本堂や境内でゲームをして遊んだり、かき氷を作ったりして楽しい一日を過ごすことができました。

子ども会は、今のところ年に数回のペースで開催していく予定です。

次回は十一月十二日（土）に青年会と合同で、親鸞聖人のご命日のつ

どい報恩講をお勤め致します。詳しくは当寺ホームページをご参照いただき、お申し込み下さい。



来年の予定

一月一日	修正会
三月二十日	春彼岸会
七月十六日	孟蘭盆会
九月二十二日	秋彼岸会
十一月十一日	報恩講

※その他、月一回で青年会、年三〜四回で子ども会の開催（花まつり・夏の子ども会・報恩講など）を予定しています。詳しくはホームページをご覧ください。お気軽にご参加下さい。



編集者雑感

この度、念願の寺報をやっと発刊することができました。今まで何だかんだとやれない、やらない言い訳を作りながら先延ばしにしてきましたが、親鸞聖人七五〇回御遠忌という尊いご縁をいただき、ここに発刊できましたことを本当にありがたく感じております。また、私事ではありますが、今年で三十五歳、恥ずかしくも聖人が御流罪にあわれた御歳と同じ年齢になりましたことも、自らの在り方を問われる大切な機縁となっております。

これらのご縁をいただく中で、当寺ではこの寺報の他にも、今年新たにホームページの開設、青年会・子ども会の開催をさせていただくこととなりました。寺という場において、今まで以上に様々な出遇いが成就することを願い、努めてまいりたいと思っております。皆様ご協力の程、よろしくお願い申し上げます。

合掌

『遇くぐうく』創刊号
 発行 浄土真宗 霊苔山 金相寺
 副住職 成田 宣明
 〒252-0328 神奈川県相模原市南区麻溝台726-1
 TEL&FAX 042-778-2879
 e-mail konsouji@aria.ocn.ne.jp.
 URL <http://www6.ocn.ne.jp/~konsouji/>
 発行日 二〇一一年十一月一日（仏歴二五五四年）